

## ロシア，ドイツ，ユーラシア理念

——今日のヨーロッパ右翼における反リベラルな地政学について——

### Russia, Germany and the Idea of Eurasia: On the Anti-Liberal Geopolitics of Today's European Right

大竹 弘 二

Koji OTAKE

#### Abstract

This paper examines the collaborative relationship between the European right and Russia during the post-Cold War period. First (1), it states that the European New Right and Russian right-wing thinker Aleksandr Dugin interacted with each other from the end of the 20th century to the beginning of the 21st century, seeking a Eurasian continental alliance between Europe and Russia based on anti-Americanism and anti-liberalism. The paper then (2) shows the Eurasianist discourse in Germany in recent years and Dugin's influence on it, and then elucidates the theoretical relationship between Dugin's geopolitics and the ideas of German Weimar conservatives such as Martin Heidegger and Carl Schmitt, and also the problematic "racism without race" inherent in their thought. The paper will then (3) show how Russia, in cooperation with European far-right parties, especially the German far-right party, Alternative for Germany (AfD), has been trying to sway European countries since the Crimean crisis of 2014. Ultimately, however, if one takes into account the German right-wing's ambivalent view of Russia, a right-wing Eurasian continental alliance would prove to be a concept of considerable impossibility.

#### はじめに

ロシアに対するドイツの右翼の見方はアンビヴァレントなものであり続けてきたし、今日なおそうであるように見える。彼らにとってロシアは、多くの場合は警戒すべき敵だが、ときに有力な同盟相手にもなりうる両義的な存在であった。20世紀前半にソヴィエト政権が誕生して以来、多くのドイツ・ナショナリストはロシアに警戒の目を向けてきた。それは米ソ両大国の台頭に伴うヨーロッパ没落への危機意識を背景とするものであり、両大戦間期ドイツのヴァイマル共和国の保守主義者（新右翼アルミン・モーラーの語で言うところの「保守革命」の思想家）は、コミュニズムのソ連とリベラリズムのアメリカをともにドイツ（およびヨーロッパ）を脅かす敵と捉えるようになって

た。ヴァイマル保守主義者のこうした地政学的認識は、「ヨーロッパは……いまや一方ではロシア、他方ではアメリカという巨大な万力のはざまにいる」<sup>1)</sup>というマルティン・ハイデガーの言によく現れている。

しかしヴァイマル保守主義者のなかには、アメリカや西欧諸国に敵意を示す反面、ソ連に対してはシンパシーを持つ者もいた。ソ連こそがドイツのもっとも信頼できる同盟者になりうるとする「ナショナル・ボルシェヴィズム」の理念は、この語の発明者とされるカール・ラデックのような共産党系の左翼政治家に限らず、右翼陣営にもその同調者を見出したのである。メラー・ヴァン・デン・ブルックや、その影響を受けたエルンスト・ニーキッシュなどがその代表であり、こうした親ロシア的な保守主義者から見れば、ドイツの主敵はアメリカ・西欧のリベラリズムや資本主義にあり、ソ連はむしろドイツにとって潜在的な味方とされるのである。

ロシアに対する両義的な評価は、第二次世界大戦後のドイツ右翼にも見出すことができる。西ドイツでは1970年代以降、ヴァイマル保守主義の思想をリヴァイヴァルするかたちで新右翼（Neue Rechte）と呼ばれる知識人が勢力を伸ばしてきた。彼らもまたドイツを米ソ両大国に挟撃される危険な地政学的位置にあるものと捉え、冷戦期には米ソ対立によって東西に分断されたドイツの悲劇的な「中間位置（Mittellage）」を嘆き、90年に東西ドイツの統一が叶うと、「中央ヨーロッパ（Mitteleuropa）」の理念を掲げて、米ソの軛から解放されたドイツが中東欧地域でヘゲモニーを握ることを期待した<sup>2)</sup>。その一方、新右翼のなかには、冷戦終結後のアメリカ型リベラリズムに基づく世界秩序への反発から、ロシアに仲間意識を持つ者も現れた。「中央ヨーロッパ」の理念には、対米関係を基軸とする戦後西ドイツの「西側結合」路線を批判し、ドイツが中央ヨーロッパへとアイデンティティの軸足を移すべきという主張が含まれていたが、そのさいロシアはアメリカに対抗するための同盟国になりうると思なされたのである。例えば、新右翼のカールハインツ・ヴァイスマンは、いまや再統一によって東方へと勢力を広げたドイツが、ロシア人とともに「ユーラシア」の「開拓」という地政学的使命に取り組むことを求めている<sup>3)</sup>。

このように一定の親ロシア性を帯びたドイツ新右翼の地政学的思考のなかで近年プレゼンスを増してきたのが、ロシアの右翼思想家アレクサンドル・ドゥーギンである。ロシアとドイツ（あるいはヨーロッパ）との大陸同盟を主張するドゥーギンの「ネオユーラシア主義」はドイツの新右翼にも少なからぬ同調者を持ち、特に2010年頃からドイツの新右翼知識人とドゥーギンとのあいだに密接な交流が生まれるようになった。アメリカ主導のグローバルな世界秩序に対抗するヨーロッパおよびユーラシアの大陸勢力の結集という反米主義的なビジョンにおいて、ドイツとロシアの右翼が結びつくわけである。そもそもドゥーギン自身が若い頃からヴァイマル保守主義に淵源するヨーロッパ新右翼の思想に大きな影響を受けていた以上、彼の地政学がドイツの新右翼に受け入れられる下地は十分にあったと言える。

ドイツ右翼とロシアとの関係に関しては、こうした知識人レベルの交流にとどまらず、現実政治の場面においても、2013年に結成された極右政党「ドイツのための選択肢（AfD）」のロシア・コネクションがしばしば指摘されている。特に2014年にロシアがウクライナのクリミアを一方的に併合して以降、ヨーロッパ各国政府がロシアに厳しい制裁を科すなかで、AfDを含むヨーロッパの極右政党はロシア政府と密接に連携してきた。AfDは、党幹部が制裁下のロシアや、併合されたクリミア、および事実上のロシア占領下で「ドネツク」・「ルガンスク」という二つの「人民共和国」が一方的に樹立されたウクライナ東部ドンバス地方にたびたび渡航するなど、ロシアの主張や行動に正当性を与えるような言動を繰り返し、「モスクワの操り人形」とも揶揄されてきたのである。

本論考は、ポスト冷戦期におけるヨーロッパ右翼とロシアとの協調関係を検討する。まず、(1) 20世紀末から21世紀初めにかけてヨーロッパ新右翼とドゥーギンが互いに交流を深めながら、反米・反リベラリズムに基づくヨーロッパとロシアとのユーラシア大陸同盟を模索していたことを述べる。次に、(2) 近年のドイツに見られるユーラシア主義的な言説とそれに対するドゥーギンの影響を示したうえで、ドゥーギンの地政学とハイデガーやカール・シュミットといったヴァイマル保守主義者の思想との理論的關係を解明し、彼らの思考に内在する「人種なき人種主義」の問題点についても指摘する。そして、(3) 2014年のクリミア危機以降のロシアが、ヨーロッパの極右政党、特にドイツのAfDなどと協力しつつ、ヨーロッパ諸国に対してどのような揺さぶりをかけてきたのかを示すことにする。だが、ドイツ右翼の屈折したロシア観を考慮するなら、結局のところ右翼的なユーラシア大陸同盟なるものは相当な無理を孕んだ構想だと言わざるをえないことが分かるだろう。

## 1 「保守革命」からネオユーラシア主義へ

### 1) ヨーロッパ新右翼の地政学

「新右翼」と呼ばれる思想潮流がヨーロッパで注目され始めたのは1970年代である。とりわけ知識人レベルでその運動を代表する人物が、「ヨーロッパ文明調査・研究集団 (GRECE)」の創設者でもあるフランス新右翼 (Nouvelle Droite) のアラン・ド・ブノワである。彼は、「保守革命」の名のもとにヴァイマル保守主義の再興を目指していたスイスの新右翼アルミン・モーラーなどと協調しつつ、旧来の親ナチス的な右翼とは一線を画した新たな右翼イデオロギーを立ち上げようとした。その特徴の一つが、時代遅れの生物学的人種主義に代わる文化的差異主義の主張である。ド・ブノワは民族や文化の違いを無視する普遍的人権のような理念を攻撃し、「差異への権利」を掲げて諸文化のアイデンティティを普遍主義から防衛しようと試みるのである。

早い時期からド・ブノワと交友のあったドイツ新右翼のヘニング・アイヒベルクは、このような(人種的・生物学的ではなく)文化的な差異の絶対化に基づいて、1970年代前半に「エスノプラリズム (民族多元主義)」という理念を提起した<sup>4)</sup>。これは民族同士が互いに交わることなく棲み分け、諸々の同質的な共同体を作って(「共存」ではなく)「並存」する国際秩序の構想である。個々人はある同質的な文化・民族の共同体に所属することが重要であり、文化間の差異は架橋不可能な本質的差異とされるのである。ここには、普遍主義のイデオロギーに反発して「政治的世界は普遍世界 (Universum) ではなく、多元世界 (Pluriversum) である」<sup>5)</sup>と述べたカール・シュミットの主張が反響している。こうして新右翼はヨーロッパの文化的固有性を外部に対して(冷戦後はとりわけ政治・経済両面におけるグローバリズムの推進者であるアメリカに対して)防衛しようとする一方、ヨーロッパの内部ではフランス・ドイツ両国を中心とする新右翼の国際的ネットワークが形成されていくことになる。

冷戦終結前後の時期にこうしたヨーロッパ新右翼の知識人サークルに食い込んできたのがロシアのドゥーギンである。ドゥーギンがヨーロッパの右翼思想と出会ったのは、1980年代前半に参加したユジンスキー・サークルにおいてである<sup>6)</sup>。50年代のモスクワで生まれたこの反体制グループは、ソヴィエト政権に代わる選択肢を神秘主義やオカルティズムのうちに見出そうとしていた。なかでもドゥーギンはフランスの伝統主義者ルネ・ゲノンやイタリア・ファシストのユリウス・エヴォ

ラ思想に魅了されたとされ、こうしたヨーロッパ右翼思想へのドゥーギンの傾倒は、80年代末からたびたび行われた西ヨーロッパ旅行のさいに多くの新右翼知識人と知り合うなかで一層強まっていた<sup>7)</sup>。

ドゥーギンがはじめて西ヨーロッパを訪問したのは1989年から90年にかけてであり、そこでド・ブノワのほか、ジャン＝フランソワ・ティリアルやロベルト・ステウカースといったベルギーの新右翼理論家たち、また、エヴォラの弟子にあたるイタリア新右翼のクラウディオ・ムッティなどと交流を持った。特にティリアルやステウカースは、ドゥーギンがヨーロッパ右翼の地政学を撰取するにあたって重要な役割を果たしたとされている<sup>8)</sup>。こうした交流を通じてドゥーギンはヴァイマル期ドイツの「保守革命」の思想にも親しみ、自らを「ナショナル・ボルシェヴィキ」と自己規定するようになる。

ロシア帰国後のドゥーギンは、1993年から98年まで自らが結党したナショナル・ボルシェヴィキ党(NBP)の党首を務める一方、ロシア連邦軍参謀本部軍事大学で講師職を得て、ロシアの軍事エリートに思想的影響力を及ぼす機会を得ることになる。92年にはド・ブノワやステウカースらをモスクワに招いてパネルディスカッションを開催したほか、ド・ブノワとともに参謀本部軍事大学でロシア軍幹部の出席のもと円卓会議を行っている<sup>9)</sup>。また、92年にドゥーギンがGRECEの雑誌『エレマン (Élément)』に倣ってロシアで創刊した雑誌『エレメンティ (Elementy)』は、編集委員としてド・ブノワ、ステウカース、ムッティの名を連ね、「保守革命」の思想の紹介に多くのページを割いていた。

もっとも、編集委員の名はド・ブノワ本人に無許可で使用され、ド・ブノワはこれに不服だったようである。また、フランス本国のメディアでロシアの極右ナショナリストとの繋がりを非難されたこともあり、93年以降ド・ブノワはドゥーギンとの関係を数年にわたって絶つことになる<sup>10)</sup>。ドゥーギンはステウカースやムッティとの関係は引き続き維持したが、94年にイタリア・フランス・スペインを再訪して以降、2000年代に入るまでヨーロッパ新右翼の知識人とはほとんど接触しなくなる<sup>11)</sup>。他方、ドゥーギンの活動がもっぱらロシア国内に限られるようになったこの時期に、彼のいわゆる「ネオユーラシア主義」がかたちを取るようになった。

## 2) ネオユーラシア主義の形成

先述のように、ドゥーギンの地政学的思考の形成にあたっては新右翼の理論家が大きな影響を与えた。特に地政学理論に精通していたステウカースは、ハルフォード・J・マッキンダーをはじめ、フリードリヒ・ラッツェル、アルフレッド・セイヤー・マハン、カール・ハウスホーファーなどの地政学者をドゥーギンに紹介したと推測される<sup>12)</sup>。マッキンダーは、ヨーロッパとアジアを連続した陸塊とみなす「ハートランド」理論を提唱し、(海洋勢力による覇権を主張したマハンとは逆に)そうした大陸勢力がやがて海洋勢力に対して優位に立つと考えた。また、ドゥーギンはド・ブノワを通じて、シュミットにおける陸と海の歴史哲学を知ったようである。シュミットは『陸と海』(1942)のなかで、世界の普遍支配を目指す(アングロ＝サクソンのな)海洋国家と自らに固有な土地に根差した(大陸ヨーロッパ的な)陸上国家とのあいだの闘争の歴史を描き出していた<sup>13)</sup>。このように陸と海を二元論的に対立させる地政学理論が、アメリカに対抗するためのロシアとヨーロッパの大陸同盟を主張するドゥーギンの思考にインスピレーションを与えたことは確かである。

ドゥーギンのユーラシア理念は、1992年の『エレメンティ』創刊号の表紙ではじめて明確に打ち出された。そこには、「ダブリン」、「第三のローマ(モスクワ)」、「ウラジオストク」の三つの地

名が記され、それが「ユーロ＝ソヴィエト帝国」という語で表現されていた。これは92年に死去したティリアールの未公開の著作『ウラジオストクからダブリンに至るユーロ＝ソヴィエト帝国』を直接的に参照したものであり、ティリアールはすでに80年代から反米的なユーロ＝ソヴィエト同盟の結成を主張していた<sup>14)</sup>。ドゥーギンはこうしたヨーロッパ新右翼の地政学に、かつてのロシアの「ユーラシア主義」の思想を接ぎ木する。そうして90年代の彼は、徐々に自らの立場を、「ナショナル・ボルシェヴィズム」に代わって「ネオユーラシア主義」という言葉で言い表すようになっていく。ドゥーギンのネオユーラシア主義は、大きな反響を呼んだ著作『地政学の基礎』（1997）ではじめて体系的に呈示されることになる。

そもそも「ユーラシア主義」とは本来、1920年代のロシアで生まれた思想潮流である。言語学者のニコライ・トルベツコイなどに代表されるこの古典的ユーラシア主義は、ヨーロッパでもアジアでもない第三の大陸としての「ユーラシア」を発見し、それをロシア文化再生の拠り所にしようとした<sup>15)</sup>。ピョートル大帝以降の西欧化路線を誤りとみなす古典的ユーラシア主義者にとっては、ロシアとヨーロッパの同盟などはありえず、むしろ西欧の「ローマ＝ゲルマン世界」は「最大の敵」とさえみなされる<sup>16)</sup>。

それに対してドゥーギンのネオユーラシア主義では、ロシアとヨーロッパのあいだの差異にはほとんど目が向けられていない。そこで問題とされるのはもっぱらアメリカとユーラシアの対立であり、大陸勢力としてのユーラシアがグローバリゼーションを推進する海洋勢力としてのアメリカに対抗するという点が強調されている。「アメリカとユーラシア……。この対立の基本原理は、ヨーロッパがロシアとともにアメリカに対抗することである。それを継続するのが、ユーラシア主義と大西洋主義の対立である」<sup>17)</sup>。ヨーロッパはロシアの同盟者とされ、「ローマ＝ゲルマン世界」に代わってアメリカが主敵となるのである。ドゥーギンにおいてこのように反米主義が前面に出てくるのは、それがかつての古典的ユーラシア主義よりも、ヨーロッパの新右翼の思想を主要な源泉としているからだと言えよう。すでに再三指摘されているように、彼のネオユーラシア主義は、ロシア固有の文脈に根差した思想というよりは、西欧的な「保守革命」のイデオロギーの「ロシア的変種」と呼ぶべきものである<sup>18)</sup>。

とはいえ、こうした反米主義的な地政学が、冷戦終結後のアメリカ主導のグローバリズムを苦々しく見ていたロシアで一定の支持を得たことも事実である。ドゥーギンは2001年4月にネオユーラシア主義推進のための「ユーラシア党」を立ち上げる。このようなドゥーギンのユーラシア運動がプーチン政権に影響を与えたという指摘がなされることもあり、たしかにプーチン自身しばしばユーラシア主義的な構想を公言することがあった。例えば、2010年11月にドイツで開かれた財界人会議のさいにプーチンは「ウラジオストクからリスボンまでの調和のとれた経済共同体の形成」を提言し<sup>19)</sup>、また、2014年5月にはロシア、カザフスタン、ベラルーシの三カ国がカザフスタンの首都アスタナで「ユーラシア経済連合」の創設条約に調印している。だが、すでに2004年6月にプーチンがアスタナでユーラシアの理念を賞賛する演説を行ったさい、直接言及されたのはドゥーギンに先立ってユーラシア主義の復興を目指していた民族学者レフ・グミリョフである<sup>20)</sup>。プーチンがドゥーギンに言及したことはないし、両者は直接の面識もないとされる<sup>21)</sup>。ドゥーギン自身のプーチン評価も一貫したのではなく、一時プーチンのリベラルな傾向を批判したり、9・11テロ以降の対テロ戦争での対米協調路線に失望したりする一方<sup>22)</sup>、プーチンが反西側政策に復帰することに期待を示してもいた<sup>23)</sup>。しかし、ドゥーギンが現実政治にまったく影響力を持たないとも言い切れない。例えばドゥーギンは、プーチン長年の盟友である企業家ウラジーミル・ヤクー

ニンと直接の交流があるし、プーチン側近の右翼オリガルヒであるコンスタンティン・マロフェエフとも関係が深いなど、ドゥーギンがモスクワのエリートたちに一定の影響力を持っていることは否定できない。

ドゥーギンがこうしてネオユーラシア主義を理論と実践の両面で推し進めていく一方、ヨーロッパの新右翼知識人は当初、これに深く関与するのを避けていたようである。ド・ブノワは一時、近代の国民国家に代わる「帝国の理念」の再生を論じ<sup>24)</sup>、ドゥーギンもこれに刺激を受けていたが、ド・ブノワ自身はユーラシアという理念に懐疑的な見方を示していた<sup>25)</sup>。実際、民族棲み分けに基づくエスノブルーリズムという新右翼の理念は、ロシアによる一種の新帝国主義と解釈できるネオユーラシア主義とは必ずしも一致するものではない。ド・ブノワは、自分がそうした広域理論を唱えたことはないとして、ドゥーギンとは一線を画す発言もしている<sup>26)</sup>。

このような立場の食い違いもあって、先述のように1990年代半ばからド・ブノワとドゥーギンの関係は途絶するが、2000年代になって再び両者の接近が見られるようになる。その背景となったのは、9・11テロ以降のアメリカによる「対テロ戦争」である。アフガン戦争やイラク戦争など、アメリカが「世界の警察」として世界各国に介入していく状況は、普遍主義の名を借りたアメリカ帝国主義を警戒する新右翼にとっては看過できぬものであった。そうして新右翼のあいだで反米主義が高まりを見せるなかで、ド・ブノワはアメリカに対抗するための大陸同盟の意義を見直したようである。彼は2009年9月に再びドゥーギンの招待でサントペテルブルクを訪問し、自身の著作のロシア語訳について紹介するほか、シュミットの著作『大地のノモス』(1950)についての講義もしている<sup>27)</sup>。またド・ブノワは、同時期にドイツ新右翼の週刊紙『若き自由(Junge Freiheit)』に寄せた論考においても、「ヨーロッパは強いロシアを再び必要としている」とし、「ヨーロッパは西側から決定的に手を切り、東側に向かわねばならない」と主張している<sup>28)</sup>。このように9・11テロ以降の世界状況のなかで、ネオユーラシア主義はヨーロッパ新右翼の言説のなかにも徐々に浸透していくことになった。

## 2 ドイツとユーラシア主義

### 1) 2000年代ドイツにおけるユーラシア地政学

戦後の(西)ドイツでは、アメリカを中心とした西側諸国との同盟関係を外交の基軸とすることに真っ向から反対する主張は、現実政治においても言論空間においてもほとんど主流とはなりえなかった。「中央ヨーロッパ」の名のもとにドイツの対米自立を訴える1990年代の言説は右翼の一部に限られ、戦後ドイツの「西側結合」路線はもはや不可逆的であるように思われた。だが2000年代に入ると、このような対米協調路線を揺るがすような出来事が生じることになる。2003年に起こったイラク戦争がそれであり、イラクへの軍事攻撃を強行するアメリカと、それに反対するドイツ・フランスなどとのあいだで、深い外交上の亀裂が生じたのである。

このような大西洋兩岸の分断のなかで、ときのドイツ首相ゲアハルト・シュレーダーはロシアとの関係強化に向けて動くことになる。そもそも彼の所属政党であるドイツ社会民主党(SPD)は、1970年代にソ連との和解を目指したヴィリー・ブランド政権以来の「東方外交(Ostpolitik)」の伝統を受け継いでおり、この精神に基づいてシュレーダーもまたドイツとロシアの新たな協力関係を模索した。シュレーダー自身は2005年に首相を退任し、その直後にロシアの半国営エネルギー企

業ガスピロムの役員に就任するが、続くアンゲラ・メルケル政権でもロシアに対する同様の外交方針が継続された。こうしてイラク戦争という状況の後押しもあり、2000年代初めのドイツでは、極右や極左の一部にとどまらない「ロシア理解者（Russland-Versteher）」と呼ばれる人々が政治の場において一定の影響力を発揮するようになる。

この時期のドイツ外交における「ユーラシア主義」的な路線に無視できぬ影響を与えたのが、企業コンサルタントであったロビイストのアレクサンダー・ラールである<sup>29)</sup>。ロシア系移民の家系に生まれた彼は、ドイツが旧来の「大西洋横断主義」に代わって、ロシアとの関係を強化する「ユーロ＝アジア的な大陸横断的なパートナーシップ」を追求すべきことを主張した<sup>30)</sup>。そして彼は、「リスボンからウラジオストクまで」及ぶ「大ヨーロッパ」を掲げて<sup>31)</sup>、イラク戦争をめぐってアメリカとの関係が悪化していたシュレーダー政権に接近する。アメリカ極集中に対抗するための、「パリ・ベルリン・モスクワ枢軸」とも呼ばれたシュレーダーの外交方針は、ラールの思考から刺激を受けたものにほかならない<sup>32)</sup>。次のメルケル政権のもとでもラールは引き続き影響力を維持し、彼の新刊本『冷たい友人：なぜ我々はロシアを必要とするか』（2011）は、メルケル政権下で外務大臣を務めたフランク＝ヴァルター・シュタインマイヤー（SPD）によって紹介されている<sup>33)</sup>。

ラールは右翼とまでは言えないものの、本質的に保守的な反リベラルである。彼はドゥーギンのネオユーラシア主義に対しては「感情的でイデオロギー的」との否定的評価を下しているが<sup>34)</sup>、ユーラシアの大陸同盟をリベラルな大西洋世界に対抗するものとして考えている点ではドゥーギンと変わらない。実際、2012年にロシアでフェミニスト・パンクバンドのプシー・ライオットが裁判にかけられたさい、ラールはリベラルな西側諸国とキリスト教文化を保持するロシアとの「新たな文明の衝突」を指摘し、「ビザンツ帝国の後継者」たるロシアが「キリスト教ヨーロッパの失われた起源に回帰しつつある」と語っている<sup>35)</sup>。彼のユーラシア構想は、西側のリベラリズムからキリスト教の伝統的価値を防衛するという意味も持っているのである。

イラク戦争とともにドイツ政府内での影響力を増したラールだったが、クレムリンでプーチンと食事を共にするなど、そのあまりに親ロシア的で非リベラルなスタンスが徐々に問題とされるようになっていく。ラールは2012年にロシアの新聞とのインタビューで西側諸国によるリベラルな価値の輸出を「攻撃的」と述べたり、13年にはユーラシアにおけるドイツとロシアの協力関係を語るさいにナチス的な「生存圏（Lebensraum）」という語を用いたりして物議をかもし、さらに14年のロシアのクリミア併合を受けて国内外のメディアがドイツにおける親クレムリン・ロビーの活動を報道し始めると、そのキーパーソンとしてやり玉に挙げられるようになった<sup>36)</sup>。こうして2010年代半ば以降、モスクワの代弁者とみなされて信用を失っていったラールは政治の場から姿を消し、ドイツのユーラシア主義的な外交路線も退潮していくことになる。

ラールほど政策決定に直接の影響を与えたわけではないが、2000年代初めのドイツでは新右翼の知識人のなかからもロシアとの協力関係に期待する声が上がった。「中央ヨーロッパ」・イデオロギーの主唱者である先述のカールハインツ・ヴァイスマンなどはその一例である。彼はラールと違って決して留保なしに親ロシア的というわけではなく、ドイツはアメリカとロシアという両大国のはざままで独自の地政学的使命を持つとする見方をしている。ヴァイスマンは、ラールの「パリ・ベルリン・モスクワ枢軸」にも、新右翼仲間やドゥーギンの「ナショナル・ボルシェヴィズム」にも賛同せず、あくまで「中央ヨーロッパ」という「中間位置」にあるドイツ固有の政治的役割を強調する<sup>37)</sup>。しかし、ヴァイスマンにとって、さしあたり現在のドイツにとっての主敵はアメリカのリベラリズムであり、これに対抗するためには、ロシアはイスラームと同じように、ドイツの一時的な

同盟相手たりうるとみなされる<sup>38)</sup>。このヴァイスマンの立場は「ユーラシア主義」とは一線を画すものではあるが、2000年代に入ってドイツの右翼地政学がアメリカ極支配への反発をますます高めるなかで、ロシアにどのような期待を寄せていたのかをよく表している。

## 2) ドイツにおけるドゥーギン

以上のような、ロシアとの同盟関係を求める2000年代初めのドイツの地政学においては、ドゥーギンのプレゼンスはそれほど大きなものではなかった。ドゥーギンの人的ネットワークはもっぱらフランス・イタリア語圏を中心に形成されており、彼はド・ブノワと並ぶ新右翼の大物であったアルミン・モーラーには会ったことがないなど、ドイツ語圏での人脈は当初は非常に限られたものだった<sup>39)</sup>。2010年くらいまでドゥーギンの名はドイツであまり知られておらず、『ツァイト』紙のようなドイツのメディアでその名が触れられる場合でも、大した影響力のない馬鹿げた「政治的宣教師」として言及されるくらいであった<sup>40)</sup>。

ドイツでドゥーギンが注目されるようになるのは2010年頃からである。そのさいに大きな役割を果たした人物が、新右翼知識人マヌエル・オクセンライターであった。2009年に創刊された右翼誌『まず第一に！(Zuerst!)』の編集長を務めた彼はドゥーギンの親しい友人であり、それまでドイツでは無名であったドゥーギンを同誌上やネット上で盛んに紹介し、また彼をドイツに招聘して講演会を開催するなどして、その名をドイツの公衆に広く知らしめた。オクセンライターはロシアのプロパガンダメディアであるRT(旧ロシア・トゥデイ)で常連のインタビュイーとして登場するようになったほか、極右政党AfDの有力若手政治家マルクス・フローンマイヤーの事務所スタッフとして働くなかで、AfDとロシアとのあいだのコネクション形成に奔走した。18年2月にウクライナのウージュホロド市でハンガリー文化センターへの放火事件が起きたさい、オクセンライターはこの事件への関与を疑われた。この放火事件は、ウクライナ民族主義者の犯行に見せかけることでウクライナとハンガリーのあいだの政治的緊張を高めることを狙ったロシア政府の資金供与による「偽旗作戦」とされており、オクセンライターには、ポーランドの親ロシア・ファシスト組織に所属していた実行犯への資金引き渡しを行ったという疑惑がかけられたのである<sup>41)</sup>。彼はこのスキャンダルによってフローンマイヤーの事務所を辞めることになったが、この疑惑の捜査から逃れるために亡命したモスクワで21年に急逝するまで、ロシアの忠実な代弁者であり続けた。

同じくドイツでのドゥーギン受容に寄与したのが、反米主義が高じて極左から極右に転向し、2010年創刊の右翼誌『コンパクト (COMPACT)』の編集長となったユルゲン・エルゼサーである<sup>42)</sup>。かねてから反帝国主義を旗印に活動していた彼は、世界金融危機のさなかの2009年に「金融資本に反対する国民イニシアティブ」を結成した頃から徐々に右傾化し、2014年からドイツで始まった排外主義デモ「西洋のイスラーム化に反対する愛国的ヨーロッパ人 (PEGIDA)」で繰り返し演説するようになるとともに、反アメリカ・反EU・反NATOの立場からロシアに接近し、RTなどロシア・メディアにおける常連のスピーカーとなった。また『コンパクト』誌は2012年以降、ロシアのNGO「民主主義と協力のための研究所」とともに「主権会議」を定期的で開催し、AfD幹部のほか、プーチン側近の実業家ウラジーミル・ヤクーニンなどをゲストに招いている<sup>43)</sup>。

エルゼサーは2013年に『コンパクト』誌上でドゥーギンへのインタビューを公開し、そのなかで彼の「ユーラシア理念」に強い関心を寄せている<sup>44)</sup>。エルゼサー自身もまた、14年4月のテレビインタビューで「リスボンからウラジオストクまでの自由な諸国民のヨーロッパ」<sup>45)</sup>というビジョンを語るなど、アメリカに対抗するユーラシア大陸同盟を主張するようになる。実際『コンパクト』

誌は、同年に起きたロシアによるクリミア併合に対して、ウクライナを「ロシアの門前における新たな NATO 国家」にしようというアメリカの目的を阻止するためにはやむをえなかったと理解を示している<sup>46)</sup>。ヨーロッパは「アメリカの操り人形」ではなく、ロシアを仲間とする一つの共同体でなければならないというのである。

こうしてドゥーギンは徐々にドイツ国内でのプレゼンスを高めていき、2013年にはドイツ・ビーレフェルト大学の学生・研究者による友愛団体「ノルマニア・ニーベルンゲン」で行われた「ドイツ地政学」に関する討論会にメインゲストとして出席している<sup>47)</sup>。また、必ずしも留保なしにロシアを信頼しているわけではない『若き自由』のような他の新右翼メディアでも、彼を「歓迎すべき対話相手」として評価する記事が出るようになったほか<sup>48)</sup>、多くの読者を持つ『シュピーゲル』誌のようなリベラルなメディアも、14年7月に「西洋人はみな人種差別主義者である」と題されたドゥーギンへのインタビューを掲載している。同年2月に起こったウクライナでのマイダン革命とそれに続くロシアのクリミア併合の直後に行われたこのインタビューで、ドゥーギンは自らが「ファシズム」とみなすウクライナに肩入れする西側諸国を揶揄したのち、欧米のリベラルな人々が考えるような普遍的価値などは存在しないという右翼の決まり文句を開陳している。

異なる社会はそれぞれの価値を持っています。普遍的価値など存在しません。普遍的価値とみなされているものは西洋の価値の投影です。西洋文明は人種差別的で、自民族中心的な文明です。西洋人はみな人種差別主義者なのです<sup>49)</sup>。

そのうえでドゥーギンは、西洋的価値の押し付けに抵抗する多極的な世界の代名詞としての「ユーラシア」理念について語り、アメリカの一極支配に反対する人々は、「中国人」だろうが「ブラジル人」だろうが、広い意味では「ユーラシア人」とであると述べている<sup>50)</sup>。彼に言わせれば、自民族中心的な普遍主義を振りかざすヨーロッパ人は、自らに固有な文化的伝統に根差すことを忘れていて、ドゥーギンはドイツ文化への愛着を述べた後で、そうしたドイツ文化がもはや存在しないことを嘆いている。自らの伝統を忘却した今日のドイツは、「一種の反ドイツ」になってしまっているというのである<sup>51)</sup>。

### 3) ドイツとロシアによる反米的な大陸同盟

2014年1月の『まず第一に!』誌のインタビューで、ドゥーギンは今日のドイツがアメリカの虜囚となっていることに苦言を呈している。「ドイツはいまや巨大な政治的-知的収容所、あるいは一種の強制収容所です。しかし今回はアメリカ人が収容所の看守なのです<sup>52)</sup>。彼は、戦後のドイツ人が「政治的自由」と「政治史に参加する権利」を失い、彼らには「経済、あるいは良くてもエコロジーへの関心」しか残されていないと述べている<sup>53)</sup>。こうした状況のなかで、ドイツは地政学の主体としての地位を取り戻さねばならないとドゥーギンは主張する。

自由で独立したドイツは、ヨーロッパ全体にとって大きなチャンスです。というのも、ヨーロッパの動力——つまりドイツ!——が自由で独立したものとなる場合にのみ、ヨーロッパもまたアメリカから自由となり解放されるからです<sup>54)</sup>。

前年に同誌上で行われたインタビューでもドゥーギンは、アメリカから解放されたドイツがロシア

とのユーラシア大陸同盟に向けて踏み出すことに期待を示していた。「ドイツ人が自分自身の存在 (Dasein) を意識し、大西洋横断主義の悪夢に別れを告げるとき、「ユーラシア」は大きく近づきます」<sup>55)</sup>。

アメリカの帝国主義的干渉を寄せ付けないヨーロッパ大陸秩序の構想は、すでに第二次世界大戦中のドイツでカール・シュミットが「広域 (Großraum)」理論として提起していた。彼は第二次世界大戦勃発の半年前の1939年4月1日に行った講演「域外列強の干渉禁止を伴う国際法的広域秩序」のなかで、いまや「ライヒ (Reich)」と呼ばれるヘゲモニー強国が指導する「広域」秩序が旧来の主権国家体制に取って代わり、そうした広域が地球上にいくつも形成されることで、多元化した世界秩序が成立するという展望を述べていた<sup>56)</sup>。そのさいヨーロッパは、ドイツという「ライヒ」の指導のもとに一つの広域として形成されるとみなされる。こうしたシュミットの広域秩序理論はナチス・ドイツの対外侵略を正当化する役割を果たすことになったが、第二次世界大戦後においてもなお、普遍主義イデオロギーによって一元化されることのない多元的世界秩序という新右翼のエスノプルーラリズム論に影響を与えている。

ドゥーギンもまた『地政学の基礎』以来たびたびシュミットの広域理論に言及し、それをネオユーラシア主義の有力な知的源泉として利用している<sup>57)</sup>。ただしドゥーギンの場合、ユーラシアという広域を指導する「ライヒ」の役割は、ロシアに託されているようである。彼にとっては、ロシアこそが新たな歴史的時代を開く使命を担っている。ロシアに対するこうした一種の終末論的な期待は、ドゥーギンのハイデガー論『マルティン・ハイデガー：別の原初の哲学』(2010)のうちのに見て取ることができる<sup>58)</sup>。ハイデガーは西洋形而上学を克服しようとする1930年代の試みのなかで、そうした克服を通じて開かれる新しい歴史の始まりとしての「別の原初」に期待し、一時ナチス国家のうちにそうした「別の原初」への移行を見出そうとした。しかし、ハイデガー自身すぐに失望してナチスから距離を置いたように、「別の原初」が1930/40年代のドイツで生じることはなかった<sup>59)</sup>。ドゥーギンにとってはむしろ、ロシアこそがその新たな始まりの場である。「ハイデガーの別の原初は西洋の人々に宛てられたものではない。それゆえ、それは我々に宛てられている」<sup>60)</sup>。西洋はもはや「アメリカニズム」に象徴される「リベラルの惑星的な愚鈍」<sup>61)</sup>を自らの内側から乗り越えることはできず、その使命はユーラシアの東方に託されたというのである。

ロシアの掲げるユーラシア理念は、アメリカ的な普遍主義イデオロギーに対峙し、それを克服するとされる。したがって、ドゥーギンにとってのユーラシアは、世界各地で存在している諸々の文化的アイデンティティのうちの一つに尽きるものではない。彼のネオユーラシア主義はたしかに新右翼のエスノプルーラリズムから一定の着想を得たものであるが、しかし彼は単に地球上における諸文化の分離並存を主張することで満足しているわけではない。むしろ、シュミットにおけるドイツ・ライヒと同じように、ドゥーギンはユーラシアに一つの特権的な位置付けを与えている。つまり、ユーラシアという大陸的理念は、アメリカの海洋的な普遍主義のアンチテーゼとして、まさに反普遍主義そのものを体現する特別な理念なのである。重要なのは、諸々の文化的共同体のあいだの分割線よりも、文化的差異を抹消する普遍主義と文化の固有性を防衛する反普遍主義とのあいだのより根源的な分割線であり、それは海と陸という二大勢力のあいだの戦線として理解される。陸と海の闘争、もしくは普遍主義と反普遍主義の闘争は、まさにシュミットにとってそうだったように、あらゆる個別の敵対関係が究極的にはそこに帰着するような根源的な敵対性とみなされる。

この二元的対立は、シュミットと同じくドゥーギンにおいても、一つの神学的な性格を帯びている。「歴史の終わり」としてのグローバリゼーションや自由民主主義の理念は人々を惑わす偽りの

救済者、すなわち「アンチ・キリスト」である<sup>62)</sup>。他方、ユーラシア理念の担い手はこうした欺瞞的な歴史の完成を抑止する者、すなわちシュミットが好んで言及する「カテコーン(抑止する者)」(新約聖書「テサロニケ人への手紙二」2:7)として、世界の普遍支配から文化的伝統の固有性を守るというわけである。

これは人間社会の歴史全体を構成してきた「水」と「土地」という二つの要素のあいだの対立ともみなされる<sup>63)</sup>。水の流動性を特徴とするアメリカ的な「タラソクラシー(海洋支配)」が結局は無秩序をもたらすのに対し、ユーラシアの「テルロクラシー(陸上支配)」は安定した土地の秩序を象徴する。ドゥーギン自身の言うところによると、彼は1990年代初頭に、シュミットの『陸と海』やステウカースだけでなく、ルーマニア出身の新右翼作家ジャン・パルヴレスコから「ユーラシア」秩序と「大西洋」秩序との来たるべき最終決戦という世界観を学んだようである<sup>64)</sup>。これをもとにドゥーギンは93年に『エレメンティ』誌に掲載された論文「大陸間における大戦争」を書き上げ、資本主義と共産主義が対立した冷戦の背後では大陸勢力と海洋勢力の秘密の闘争が誰にも気づかれることなく繰り返られていたという陰謀論的な地政学を開陳する<sup>65)</sup>。こうしてドゥーギンは、「新しいカルタゴ」(アメリカ)と「新しいローマ」(ロシア)との隠れた世界史的闘争という「オカルト・ポエニ戦争」によって歴史を解釈することになる。この陸と海との対立は、(ドゥーギン自身がドイツ語で表現するところの)「最終闘争(Endkampf)」として、一種の終末論的な闘争とされるのである。アメリカを中心とする西側諸国は「アンチ・キリストの王国」であり「悪の王国」であって、破壊されるべき「新しいカルタゴ」である。それに対してロシア人は、「宇宙的次元の国民」であり「超越の諸力と調和」している。「我々〔ロシア人〕は神の民族である。……ロシアと宇宙、それは同義語である」<sup>66)</sup>。

#### 4) ファシズムか、「第四の政治理論」か？

ドゥーギンは国内外で話題となった著作『第四の政治理論』(2009)のなかで、「保守革命」の思想こそが今日のリベラリズムを乗り越えることのできる唯一の選択肢であるというテーゼを明確に打ち出している。「第一の政治理論」としてのリベラリズムに対して、「第二の政治理論」としてのコミュニズム、および「第三の政治理論」としてのファシズム・ナチズムは、それを克服することに失敗した。いま創造されるべきは「第四の政治理論」であり、「保守革命」の思想はその鍵をなしているとされる。そして、「ナショナル・ボルシェヴィズム」と「ユーラシア主義」は、この「第四の政治理論」の「二次的な派生形」にほかならない<sup>67)</sup>。

このさい問題となるのが、「第三の政治理論」と「第四の政治理論」の区別である。「第四の政治理論」がファシズムやナチズムに親和的とされる両大戦間期の「保守革命」の思想に依拠しているとすれば、それは「第三の政治理論」からいかに差別化できるのか。ドゥーギンは生物学的人種主義の拒否によってそれが可能になると考えているようである。彼によれば、ファシズム・ナチズムに近いとされている「保守革命」の思想には本来、人種主義は含まれていない。例えば、イタリア・ファシズムの思想家と目されるエヴォラは、ナチズムの生物学的決定論に反対し、人々をその精神的本質において区別する形而上学的な人種論(「精神的人種主義」)を主張していた。またドゥーギンは、シュミットが主張した「ライヒ」はヒトラーの人種主義的な「<sup>ライヒ</sup>帝国」とは異なるとも述べている<sup>68)</sup>。実際シュミットは、その理論のうちに人種イデオロギーが希薄だったことで、ナチス親衛隊に近い人種-民族主義的な党内グループから攻撃を受け、1930年代半ばには政権から遠ざけられている<sup>69)</sup>。そしてドゥーギンもまた建前上は反人種主義の立場を保持しており、その点においては、

古典的な人種主義を継承しているギヨーム・ファユのような今日のヨーロッパ右翼のアイデンティタリアン運動とも、マイケル・オメーラやグレッグ・ジョンソンのような北米の白人至上主義者たちとも一線を画している<sup>70)</sup>。

ゲノンとエヴォラの伝統主義を知的源泉とするドゥーギンにとって、アイデンティティの基礎は、歴史や伝統に基づく精神性のうちにある。それゆえ、ハイデガーの「現存在 (Dasein)」は「第四の政治理論」の核心的な概念とみなされる。「第一の政治理論」(リベラリズム)における「個人」、  
「第二の政治理論」(コミュニズム)における「階級」、  
「第三の政治理論」(ファシズム・ナチズム)における「人種」や「国民」に代わって、「第四の政治理論」の主要な主体は、ハイデガー的な現存在の概念のうちに見出すことができる<sup>71)</sup>。ハイデガーはすでに『存在と時間』(1927)のなかで、現存在を単に人間個人だけでなく、「民族」や「共同体」にも関わる概念としていたが<sup>72)</sup>、1930年代になるとこうした共同体主義的な現存在解釈がより前面化する。現存在は「他者との共同存在」のうちであり、自らの歴史性(「運命」)を「共同運命 (Geschick)」として経験するのであるから、それはまさに民族の歴史や伝統のうちに埋め込まれた人間の本来のあり方を示すものとされるのである。ドゥーギンもまた、反リベラルではあるが決して人種主義的ではない「ナロード (人民)」のうちに「ロシアの現存在」の表現を見て、それをリベラリズム的な個人に代わるユーラシア主義の根本概念とみなしている<sup>73)</sup>。30年代のハイデガーと同じく、ドゥーギンにおいても、個人は民族共同体の歴史や伝統との繋がりの中で自らの本来のあり方に立ち返るのである。

しかし、ドゥーギンはこれによって「第四の政治理論」をファシズムやナチズムから区別することに成功していると言えるだろうか。実際のところそれは疑わしい。人種ではなく、歴史や伝統に基づいて排外主義を正当化しようとする試みは、今日の右翼の常套手段となっているからである。実際、ハイデガーの「哲学的ナショナリズム」は、ドイツの新右翼によってもしばしば利用されている。例えば、先のヴァイスマンとゲッツ・クピチュクによって設立された新右翼シンクタンク「国家政治研究所 (IfS)」の機関誌『独立 (Sezession)』は、ナチス期の覚書を含むハイデガーの遺稿『黒表紙のノート』の出版(2014)に伴って彼のナチ・コミットをめぐる論争が盛んに行われていた2015年2月に、ハイデガーの特集号を出している。そこに掲載されたクピチュクの序言では、まさにこのときドイツで盛り上がりを見せていた排外主義デモ PEGIDA の掲げる「ドイツ人民」がハイデガーの「現存在」と重ね合されて解釈されているほか<sup>74)</sup>、オーストリアのアイデンティタリアン運動の指導者マルティン・ゼルナーの論文においては、ハイデガーの思考がナチスの人種主義に反対しているとされる一方で、「具体的な民族文化の土壤に根差した」ハイデガーの「現存在」が暗に新右翼のエスノブルールリズム論と結びつけられている<sup>75)</sup>。

現実政治の場においても、極右政党 AfD の政治家がしばしばハイデガーが拠り所としながら、自らの排外主義的な主張を展開している。例えば、哲学者ペーター・スローターダイクの弟子であり、AfD バーデン＝ヴュルテンベルク州の党スポークスマンを務めたのち国会議員になっているマルク・ヨンゲンは、イスラームの脅威に直面したときにドイツは「存在の忘却」から目覚め、自らの歴史的起源へ精神的に回帰するとしている<sup>76)</sup>。また、AfD 党内の最右翼派閥「翼 (Der Flügel)」のリーダーであり、IfS と関係が深く、PEGIDA デモにおいても頻繁に講演している AfD チューリンゲン州代表のピョルン・ヘッケも、二〇一五年の AfD 党大会においてハイデガーに言及しながら、ドイツ人は「存在の忘却」から抜け出て「存在の秩序」に戻らねばならず、ドイツ人としての「我々」を「肯定」しなければならないと述べている<sup>77)</sup>。このように歴史的アイデンティティに基づく排外的なナショナリズムの主張は、人種主義ではないからナチス的ではなく、固有の文化の尊重を訴え

ているだけであるというのは、右翼お決まりの弁明である。生物学ではなく、歴史・文化・精神などを引き合いに出すことは、人種主義の嫌疑を逃れるアリバイとして都合が良いのである。

だが、そもそも「人種」というものは近代になって創出された疑似概念であり、生物学的カテゴリーとしては存在しない。「人種主義」は、科学的カテゴリーとしての人種に基づく差別というよりは、何らかの仕方で行われた区別や分類をあたかも絶対的なものであるかのようにみなし、その区別・分類を本質化する、すなわち「人種化」することで引き起こされる差別である。それゆえ、ハイデガーの民族主義がたとえ存在論的な基礎に基づくものであったとしても、それは容易に人種主義的な言説に転化しうる。同じように、シュミットはたしかにナチスの人種・生物学的イデオロギーを受け入れていないが、しかし特定の土地に根差した秩序から切り離された普遍主義イデオロギーのうちに「ユダヤ性」を見出す彼の法学-歴史哲学的な反ユダヤ主義はなお人種主義と名指されねばならないし、また、「アーリア人」と「ユダヤ人」をその「精神性」において区別するエヴォラの「精神的人種差別」も、やはり人種差別であることには変わらない。ドゥーギンの神話的な世界観も、人種という「近代的な」概念には依拠しておらず、むしろ宗教的・前啓蒙的な性格を持っているが、だからといって「ドゥーギンを人種主義者ではないとみなすのは誤りである」<sup>78)</sup>。和解不可能な地政学的敵を設定するドゥーギンのネオユーラシア主義にも人種主義は内在しているし、それはたとえ彼が「ユーラシア」をロシアの多民族性に適合した反人種主義的な理念として提起しているとしてもそうなのである。エティエンヌ・バリバルが新右翼のエスノプルーリズムに対して批判したように、何らかのアイデンティティ同士を相互排除的なものとみなし、それらの差異を絶対化する言説である限りで、それは「人種なき人種主義」または「差異主義的な人種主義」と呼ぶことができる<sup>79)</sup>。

### 3 ヨーロッパ極右政党のロシア・コネクション

#### 1) 極右政党の国際的連帯

2010年代に入ると、ロシアとヨーロッパの右翼知識人同士の交流にとどまらず、ロシア政府とヨーロッパ極右政党とのあいだの協力関係が目立つようになってきた。ロシア政府は、反リベラルな保守的イデオロギーの面で親和性のあるヨーロッパ極右政党を「トロイの木馬」として利用し、西側諸国の不安定化を図ってきた。とりわけ2014年のクリミア併合によって西側諸国から制裁を科されて孤立化したロシアにとって、反EUの立場を取るヨーロッパ右翼政党は、ヨーロッパ諸国の足並みを乱すのに都合の良い存在であった。

実際、フランス国民戦線（現・国民連合）の党首マリーヌ・ルペン は、かねてから反米主義、キリスト教的価値の擁護、同性婚の拒否、EU批判などの点で高く評価していたプーチン政権に、クリミア併合以降もなお賞賛の声を寄せている。「プーチンは愛国者です。彼は自国民の主権に愛着を持っています。彼は私たちが共通の価値を持っていることを分かっています。それはヨーロッパ文明の価値です」<sup>80)</sup>。ルペンはまた、対ロ制裁のさなかの2014年11月にプーチン与党の「統一ロシア」の幹部をパリに招き、オランダ自由党のヘルト・ウィルデルス、オーストリア自由党のハインツ＝クリスティアン・シュトラヘ、イタリアの北部同盟（現・同盟）のマッテオ・サルヴィーニなどとともに、各国の極右政党の連帯を強化する国際会合を開催している<sup>81)</sup>。

このようなヨーロッパ極右政党のロシア・コネクションにおいても、しばしばドゥーギンの影

がちらついている。2014年6月にロシアの右翼オリガルヒであるマロフェーエフは、自らの設立した聖ブラシウス財団を通じてウィーンのリヒテンシュタイン宮殿で国際会議を主催しているが、ドゥーギンはこのさい基調講演者を務めている<sup>82)</sup>。1814～15年のウィーン会議直後に締結された神聖同盟の200周年記念という名目で行われたこの会議には、オーストリア自由党のシュトラヘーヤ、フランス国民戦線の創設者ジャン＝マリー・ルベンの孫娘であるマリオン・マレシャル・ルベンをはじめ、スペイン・ブルガリア・クロアチアなどから民族主義者や君主主義者が参加し、墮落したりベラリズムから伝統的なヨーロッパを救い出すための極右の国際協調について話し合われた。そのさいロシアの役割には大きな期待が寄せられ、この会議を報道したスイスの『ターゲスアンツァイガー』紙は、これを「プーチンの第五列の首脳会談」と書き立てている<sup>83)</sup>。

モスクワの「第五列」としてのヨーロッパ極右政党の活動を具体的に示しているのが、ロシアの占領下に置かれたクリミアやドンバス地方での選挙監視業務である<sup>84)</sup>。そもそもソ連崩壊後の旧ソ連諸国で行われる選挙においては、当初、主に欧州安全保障協力機構（OSCE）によって選挙監視団が派遣されて、選挙の民主的信頼性を担保してきた。ところが、2000年代初めにジョージア・ウクライナ・キルギスで起きた「カラー革命」でロシア寄りの政権が倒されるといった状況のなかで、ロシアは西側主導のOSCEに代わって旧ソ連諸国での選挙監視にあたる対抗組織を支援するようになる。その中心的な組織が、2003年に設立された「独立国家共同体＝選挙監視組織（CIS-EMO）」である。CIS-EMOは非政府組織（NGO）でありながら基本的にクレムリンに忠実であり、ヨーロッパから親ロシア的な国際選挙監視員をリクルートするさいに多くのヨーロッパ極右の人脈を利用した。

このCIS-EMOの下請けとしてヨーロッパでの監視員募集にあたったのが、ティリアールの弟子であったベルギーの極右リュック・ミシェルが2007年に設立した「ユーラシア民主主義・選挙監視団（EODE）」、および、ポーランドの新右翼マテウシュ・ピスコルスキにより同じく2007年に設立された「ヨーロッパ地政学分析センター（ECAG）」である。ミシェルやピスコルスキはすでにそれ以前から、モルドバの沿ドニエストルの独立住民投票やジョージアのアプハジアの議会選挙など、各国の親ロシア派分離地域で行われた選挙に監視員として参加していた。そして、2014年3月にクリミアでロシアへの編入の是非を問う住民投票が行われたさい、EODEとECAGに国際選挙監視員の募集が委託された。その結果クリミア住民投票に派遣された監視員のリストには、フランスの国民戦線、オーストリア自由党、イタリアの北部同盟、ベルギーのフラームス・ベランフ、ハンガリーのヨッピクといったヨーロッパ極右政党のメンバーが名を連ね、住民投票の民主性や公正性のアリバイ作りのための監視活動に携わるようになった。

ただし、このようにロシア政府の意向に沿うかたちで国際選挙監視に協力してきた勢力のなかには、ドイツの左翼党やギリシア共産党といったヨーロッパの左翼政党の一部も含まれている。これらの政党のメンバーもまたクリミア独立住民投票の選挙監視員となっており、ドイツの左翼党に関して言えば、2015年に党の外交問題スポークスマンであったヴォルフガング・ゲールケらが東ウクライナで親ロシア派分離主義者と会合を行って写真を共にしているほか<sup>85)</sup>、2018年に党の地方政治家であったアンドレアス・マウラーは、ロシア大統領選挙におけるクリミアでの投票や、東ウクライナのいわゆる「ルガンスク人民共和国」の首長および議会選挙で、選挙監視員を務めている<sup>86)</sup>。ゲールケもまたロシア・メディアのRTの番組で「アメリカにとっての悪夢」である「ユーラシア連合」を主張しており<sup>87)</sup>、したがって、「ロシア理解者」は必ずしも右翼に限られるわけではない。とはいえ、クリミア併合以降に積極的にロシアに協力してきた親ロシア的な政治勢力は、

総じてヨーロッパの右翼政党の側に偏っていると言える。

## 2) 「モスクワの操り人形」としての AfD ?

2013年2月に結党された極右政党 AfD (ドイツのための選択肢) は、党の外交方針としてはじめから親ロシア的な路線を採用していた。同年9月に当時の党副代表でのちに党代表となるアレクサンダー・ガウラントは AfD の外交方針についての文書を発表しているが、そのなかで彼は、ピスマルクの現実主義的な勢力均衡外交への回帰を唱えたうえで、「ドイツとヨーロッパは、ロシア、そしてそれとともにユーラシア空間全体をこれ以上弱体化させることには何の関心もない」と述べていた<sup>88)</sup>。彼はロシアのクリミア併合後も一貫してロシア擁護の姿勢を崩すことなく、西側の対ロシア制裁に反対するとともに、「クリミアはロシア本来の領土であり、ウクライナに戻ることはありえない<sup>89)</sup>」と主張している。

とりわけクリミア併合後のロシアと AfD との蜜月関係については、2019年4月6日付の『シュピーゲル』誌の特集「モスクワの操り人形」で詳しく報じられている<sup>90)</sup>。それによると、15年10月に、ガウラント、および党青年組織「若き選択肢 (JA)」の若手政治家であるマルクス・フローンマイヤーらが、右翼オリガルヒであるマロフェーエフの財団の招待でサンクトペテルブルクを訪問している。このとき彼らはロシアの与党「統一ロシア」の幹部アンドレイ・クリモフのほか、ドゥーギンとも会見している。また、17年2月には当時の党代表フラウケ・ペトリとその夫で AfD 欧州議会議員のマルクス・プレツェルがロシア側の費用負担によるプライベートジェットでモスクワを訪問したことが問題となった。

なかでもフローンマイヤーは、AfD とロシア、そしてドイツ新右翼知識人を結びつける鍵となる人物である。ルーマニアで生まれたのちドイツ人の家庭に養子に出され、ロシア人の妻を持つ彼は、AfD 内でも急進的な右翼派閥に属するとともに、党内屈指の親ロシア派でもある<sup>91)</sup>。彼はロシアがクリミア併合後にクリミア半島ヤルタで定期的に開催しているヤルタ経済フォーラムに、少なくとも2016年4月と18年4月に参加している。また、先述のように彼自身ガウラントとともに訪問したサンクトペテルブルクでドゥーギンと面会しているほか、ドイツにおけるドゥーギン紹介者である新右翼のオクセンライターを事務所スタッフとして一時雇用していた。さらにフローンマイヤーは16年4月に、オクセンライター、および先に述べたポーランド新右翼のピスコルスキとともに、ベルリンに「ユーラシア研究ドイツセンター」を設立し、ユーラシア理念のもとでロシアとの関係強化を進めようとした<sup>92)</sup>。19年4月に『シュピーゲル』誌は、ドイツの公共放送 ZDF やイギリス BBC、およびイタリアの『ラ・レプブリカ』紙とともに、プーチン政権内で流通していたとされる戦略文書について報道している<sup>93)</sup>。EU 諸国を不安定化させ、ロシアに有利なプロパガンダを広めることを目的としたその文書では、フローンマイヤーへの「支援」について言及されており、彼がモスクワの「絶対的なコントロールのもとにある」ドイツの国会議員になることに期待が表明されていたという。

この戦略文書でも親ロシア的な国際選挙監視団が有効なプロパガンダ手段の一つとして挙げられていたが、AfD もやはり他のヨーロッパ極右政党と同様に、クリミア併合以降に旧ソ連圏で行われた選挙の監視任務に積極的に協力している。2018年のロシア大統領選挙のさいには、AfD 所属の国会議員ウルリヒ・エーメがクリミアでの投票の監視員として立ち会っている<sup>94)</sup>。とりわけ、14年に親ロシア派分離主義勢力がウクライナ東部ドンバス地方にたてた「ドネツク人民共和国」と「ルガンスク人民共和国」での選挙監視業務に AfD 関係者が目立っている。16年7月にこれらの「人

民共和国」で予備選挙が行われたさいには、AfD のチューリンゲン州議会議員トーマス・ルディとバーデン＝ヴュルテンベルク州議会議員ウド・シュタインがオクセンライターとともにこの監視にあたり、それらが完全に民主的に行われたとのお墨付きを与えている<sup>95)</sup>。また、18年11月に「ドネツク人民共和国」で行われた首長・議会選挙には、AfD ベルリン市議会議員のグンナー・リンデマンがオクセンライターなどとともに国際選挙監視員として参加し、ウクライナによって入国禁止措置を受けている。リンデマンは19年にジョージアの二つの親ロシア派分離地域である南オセチアとアブハジアで議会選挙が行われたさいにも選挙監視にあたっている<sup>96)</sup>。

先のロシアの戦略文書が報道されたとき、フロンマイヤーはその文書の真偽を疑って「馬鹿げている」とコメントし、AfD も自党に対するロシアの影響を「ナンセンス」として否定しているが<sup>97)</sup>、実際のところドイツの主要政党のなかでは、しばしばロシア寄りの姿勢が垣間見える左派の左翼党と比較しても、AfD がもっとも親ロシア的な言動を続けてきたことは確かである。ヨーロッパ内部を分裂させ、自国に有利な世論を作り出そうとするクレムリンのプロパガンダ戦略の一環として、AfD がドイツ国内に打ち込まれたロシアの楔のような役割を果たしてきたことは否定できない。

### 3) ドイツにおけるロシアの情報戦争

2007年にエストニアが首都タリンのソ連戦勝記念像撤去をきっかけにロシアから大規模なサイバー攻撃を受けて以来、ロシアの情報戦争の脅威は徐々にヨーロッパ諸国に認識されるようになってきた。ドイツでは、2015年5月に連邦議会がロシアのハッカー集団ART28（ファンシーベア）から最初の深刻なハッカー攻撃を受けている。より目に見えるかたちでは、2014年からロシア・メディアのRT（旧ロシア・トゥデイ）およびスプートニクがドイツ国内でも番組の提供を開始し、ロシア寄りの報道を展開してきた。だが、自らがロシアの情報戦争の標的となっていることをドイツ社会に強く意識させることになったのは、2016年初頭に起きた「リーザ事件」である。

この事件の発端となったのは、ヨーロッパ難民危機のさなかの2016年1月上旬に、ベルリンに住む13歳のドイツ人少女リーザ・Fが数名の中東系移民の男によって監禁され、暴行を受けたという噂が広まったことである<sup>98)</sup>。ベルリン警察が当該の少女に聴取した結果、この話は彼女が思いついた単なる家出の言い訳だったことが確認され、警察は1月14日にそうした暴行事件は存在しなかったことを発表した。しかし、少女がロシアから移住してきた「ロシアドイツ人」だったこともあり、この噂はとりわけロシアドイツ人のコミュニティのあいだに大きな波紋を呼び起こすことになった。まず16日にロシア・メディアのチャンネル1がこれを事件として報じると、RTやスプートニクがこれに続き、警察による事件の隠ぺいを疑う報道をしたこともあって、ロシアドイツ人の市民による街頭での抗議活動が広がった。そして、23日にはベルリンの首相官邸の前で、難民受け入れ反対と事件の真相究明を求めるロシアドイツ人ら約700人の抗議デモが行われることになる。

1月26日になるとロシアのラブロフ外相がモスクワの会見で「私たちの少女リーザ」の事件を持ち出し、ドイツ政府が難民受け入れ反対の世論を高めないように事件をもみ消そうとしていると暗に非難した。これに対し、ドイツのシュタインマイヤー外相はこのラブロフ外相の発言を、「ただでさえ難しいドイツ国内の移民論争に影響を与え、焚きつける」ための「政治的プロパガンダ」と批判し<sup>99)</sup>、これにラブロフ外相が再反論するなど、「リーザ事件」は両国の外交的軋轢を引き起こすまでに至った。

この一連の出来事を受けて2016年春にメルケル首相は、ロシアの情報操作がドイツ政治にどの程度影響を与えているかの調査を連邦憲法擁護庁と連邦情報局（BND）に命じている。2017年2月に出されたその調査報告書は、「リーザ事件」にロシア政府が関与した明確な証拠は見つけられなかったと結論付けている一方で、RTやスプートニクといったロシア・メディアの活動を「敵対的」と断じている<sup>100</sup>。また、2017年7月の連邦内務省の憲法擁護報告書でも「リーザ事件」に関連して、ロシア政府の息のかかった「虚偽情報のキャンペーン」が、ドイツ国民の分断、ドイツのメディアや政府に対する信頼の毀損、難民論争の激化を引き起こしたと警告されている<sup>101</sup>。この事件をきっかけとして、ドイツでは、他国の住民を対象とした情報操作のような、非軍事的手段を動員したロシアの「ハイブリッド戦争」が脅威として認識され、メルケル首相が「ハイブリッド戦争の一部としてのフェイクニュースへの対処」<sup>102</sup>は急務であると発言するに至ったのである。

その一方で、ロシアによる情報戦争の影響を過大に見積もるべきではないという声もある。そうしたロシア・プロパガンダの過大評価は、2017年2月にドイツ・メディアを賑わせた、リトアニア駐留ドイツ連邦軍兵士に関わる事件についての報道に見て取ることができる<sup>103</sup>。それは『シュピーゲル』誌のオンライン版が最初に流した記事が発端となったもので、酔ったドイツ兵の集団がリトアニアの児童養護施設の少女に性的暴行を加えたというフェイクニュースをロシアが拡散しているというものであった。これを受けて、他のドイツの主要メディアも次々と「ドイツ連邦軍に対するフェイクニュース攻撃」を報じることになった。だが、実はこの『シュピーゲル』の記事の出典となったのは、リトアニア議会議長ヴィクトラス・プランツキエティスのもとに届いた一通の真偽不明の匿名メールだけで、記事を書いた『シュピーゲル』の記者はこのメールのことを教えてくれた「あるNATO高官」の話をもとに、それをロシアの情報機関が背後にいるフェイクニュース攻撃であるとみなしたのであった。ごく些細な事実が出典となっているにすぎず、また、リトアニア警察がすぐに事実無根として否定し、現地では大した騒ぎにならなかったこのニュースをロシアのフェイクニュース攻撃として騒ぎ立てること自体が、いわば「フェイクニュースについてのフェイクニュース」を流しているようなものであると言える。同年2月23日付のドイツの『ツァイト』紙は、十字線の照準を合わされた連邦議会議事堂のイラストとともに「狙われたドイツ」という大見出しを一面に掲げているが<sup>104</sup>、このようにロシアの情報戦争の脅威を必要以上に大きく見積もって報道するようになったドイツ・メディアを諷める意見も存在している<sup>105</sup>。

ドイツに対するロシアの情報戦略を取り上げるさいに考慮すべきアクターの一つとして、「リーザ事件」でも注目された「ロシアドイツ人」が挙げられる。ロシアドイツ人とは、18世紀にロシアが黒海北部地域やヴォルガ地域を領有したさい、自身もドイツ出身であったロシア皇帝エカチェリーナ2世の招きに応じてこれらの地域に移住したドイツ人入植者たちの子孫であり、冷戦終結前後、とりわけ1990年代以降に（もっぱら経済上の理由から）ドイツに「帰還」した「民族的ドイツ人」である。「後期移住者」シベリアのシベリアとも呼ばれる事実上の移民である彼らの多くは比較的うまくドイツ社会に統合されているが、一部にはドイツ語能力の不足や保守的な価値観ゆえにドイツに十分適応できない者もあり、そうした人たちのなかにはドイツ国内でも番組を提供しているRTやスプートニクなどを情報源として利用している者もいる。ロシア政府から見れば、彼らはロシアの影響圏にある人々であり、ドイツ国内に情報戦を仕掛けるにあたって利用価値のある住民集団とみなされる。そうしたことから、連邦憲法擁護庁長官のハンス＝ゲオルク・マーセンは、ロシアの情報戦略によりドイツ在住のロシア語話者の市民が「ドイツ国家に反抗するよう煽動される」ことに懸念を示していた<sup>106</sup>。

極右政党AfDはこれまで、こうしたロシアドイツ人を見据えた政治活動を行ってきた<sup>107)</sup>。例えば、2017年の連邦議会選挙において、AfDはロシア語の資料を作成するなど、ロシアドイツ人に向けて選挙活動を展開した唯一の政党であり、同選挙ではロシアドイツ人の国会議員を二名誕生させている。また、性急に直接的な因果関係を見出すことは慎重であるべきだが、ロシアドイツ人の多い地域で相対的にAfDが多く得票しているとのデータもある<sup>108)</sup>(ただしこれはロシアドイツ人のなかでAfD支持が多数派という意味では決してない)。AfDが一貫して親ロシア的な立場を維持してきたのは、ロシア政府とのイデオロギー的な親和性に加え、ロシアドイツ人の有権者を取り込もうとする実利的な理由もあったと考えられる。

たとえ両者が反リベラルな保守イデオロギーの点で近い立場にあるとしても、AfDのようなヨーロッパ極右勢力に対するロシア政府の肩入れがどの程度心情的な共感に基づくものであるかは不明である。2016年11月末に連邦情報局(BND)長官のブルーノ・カールが、ロシアの妨害キャンペーンとハッカー攻撃は「政治的不確実性をもたらす以外の意味はない」と警告したように<sup>109)</sup>、今日のロシアの情報戦争は、特定のイデオロギー的主張を広めるというよりは、西側諸国のうちに不信と分裂を生み出すことを第一の目的としているようである。その限りで、ヨーロッパ極右勢力に対するロシア政府の接近は、理念やイデオロギーへの共感に基づくというよりは、西側社会を不安定化させる手段としてそれらの過激派を機会主義的に利用したにすぎないとみなすこともできる。結局のところヨーロッパの右翼は、ロシアが権力政治を貫徹するための(レーニンの語で言うところの)「役に立つ馬鹿」以上の役割を果たしていないように見える。

### おわりに——ユーラシア理念のゆくえ

むろんドイツの右翼が皆、ロシアに対してシンパシーを持っているわけではない。すでに述べたように、ドイツの右翼は歴史的に、ロシアを必ずしも地政学的な味方ではなく、むしろ敵として認識することも多かった。特に、第二次世界大戦末期の東部戦線でソ連赤軍がドイツ人住民に対して行った虐待・殺害・大量追放、また戦後におけるドイツの東方領土の割譲といった経験もあり、ロシアとの無条件な友好関係を快く思わない右翼関係者も多く存在する。例えば、2019年の5月9日(ロシアの対独戦勝記念日)にAfDの国会議員ロビー・シュルトがベルリンのトレプトウ公園にあるソヴィエト記念碑で献花を行ったさい、新右翼誌『若き自由』はこれを「間違った友愛」として激しく批判している。「愛国的な選択肢であることを主張する党にとって、5月9日に昔の勝者のために花輪を編むことは許されないはずだ」<sup>110)</sup>。したがって、ドイツの右翼のなかでもロシアに対する態度は完全に一致しているわけではない。

2022年2月24日に始まったロシアのウクライナ侵攻は、それまでのドイツの右翼におけるロシア寄りの地政学的認識にも否応なく影響を与えたようである。AfD最右翼派閥「翼」のリーダーであるヘッケは侵攻開始直後に、ウクライナを「NATO(西)とロシア(東)のグローバルなレベルでの地政学的対立の犠牲者」と呼んでいる<sup>111)</sup>。また、ドイツ新右翼のジャーナリストであるクラウス・クンツェは新右翼誌『我ら自身』において、「プーチン是我々の友人ではない」としたうえで、「我々はアメリカとロシアという二つの敵によって挟撃されている」と言明している<sup>112)</sup>。あたかもドイツの右翼は、かつてのヴァイマル保守主義者にとって「アメリカ・リベラリズム」と並ぶ仇敵であった「ロシア・ボルシェヴィズム」の脅威を改めて認識し、「中央ヨーロッパ」という自らの

危険な地政学的位置を再び発見したかのようだ。

他方で、エルゼサーなどはロシアのウクライナ侵攻後も、「この攻撃はアメリカの主導する NATO に起因するものだ」として、「ドイツとロシアはもう二度と互いに対立するよう唆されてはならない」と述べるなど、依然としてロシア寄りの立場を捨てていない<sup>113)</sup>。また、2022年3月10日にエルゼサーとともにドイツのウクライナ支持に反対する集会を開いた AfD のリンデマンは<sup>114)</sup>、その後のロシア軍のマリウポリ小児病院攻撃やブチャの虐殺の報を受けてもなお、モスクワの主張に沿ったロシア擁護の発言を繰り返している<sup>115)</sup>。

AfD は、ロシアへの経済制裁やウクライナへの武器供与には反対しつつも、ウクライナ侵攻に関して一致した意見が形成されているとは言えず、侵攻開始以来、対ロシア政策をめぐる党内に深刻な対立が生まれている。この侵攻は、それまでロシアとヨーロッパ右翼とのあいだでまがりなりにも共有されてきたユーラシア同盟の理念を危機に晒しているようである。結局のところ、ロシアとヨーロッパの地政学的な一体性というドゥーギンが期待したようなビジョンは、理念においても現実政治においても相当な困難を抱えていると言わざるをえず、ユーラシアの理念が今後もヨーロッパの右翼に受け入れられ続けるかどうかは不透明である。

#### 注

- 1) マルティン・ハイデガー『形而上学入門』岩田靖夫／ハルトムート・プラーナー訳、創文社、2000年、p. 42。(原文参照のうえ改訳)
- 2) 再統一前後のドイツにおける「中央ヨーロッパ」論争については、大竹弘二「地政学的運命としての「中間位置」? : 1980/90年代のドイツにおける「中央ヨーロッパ」論争」、『思想』, No. 1056, 2012年, pp. 30-52.
- 3) Karlheinz Weißmann, *Rückruf in die Geschichte. Die deutsche Herausforderung*, Berlin, 1992, S. 173ff.
- 4) Vgl. Thomas Pfeiffer, »Wir lieben das Fremde — in der Fremde« Ethnopluralismun als Diskursmuster und -strategie im rechtsextremismus«, in: Jennifer Schellhöf / Jo Reichertz / Volker M. Heins / Armin Flender (Hrsg.), *Großerzählungen des Extremen. Neue Rechte, Populismus, Islamismus, War on Terror*, Bielefeld, 2018, S. 38.
- 5) カール・シュミット『政治的なものの概念』権左武志訳、岩波文庫、2022年、p. 57。(原文参照のうえ改訳)
- 6) Anton Shekhovstov, "Alexander Dugin and the West European New Right 1989-1994," in Marlene Laruelle (ed.), *Eurasianism and the European Far Right*, Lexington Books, 2015, p. 35 および、チャールズ・クローヴァー『ユーラシアニズム：ロシア新ナショナリズムの台頭』越智道雄訳、NHK出版、2016年、第8章、参照。
- 7) 1980年代末から90年代初めのドゥーギンの西ヨーロッパ訪問と、そのさいの彼と新右翼理論家との交流については、Shekhovstov, "Alexander Dugin and the West European New Right 1989-1994" および、クローヴァー『ユーラシアニズム』, 第9章、に詳しい。
- 8) Cf. Shekhovstov, "Alexander Dugin and the West European New Right 1989-1994," pp. 37-38.
- 9) Shekhovstov, "Alexander Dugin and the West European New Right 1989-1994," pp. 43-44, および、クローヴァー『ユーラシアニズム』, pp. 327-333, 参照。
- 10) Shekhovstov, "Alexander Dugin and the West European New Right 1989-1994," pp. 43-44, および、クローヴァー『ユーラシアニズム』, pp. 332-333, 参照。
- 11) Cf. Shekhovstov, "Alexander Dugin and the West European New Right 1989-1994," p. 46.
- 12) Cf. *ibid.*, pp. 37-38.
- 13) カール・シュミット『陸と海と』生松敬三／前野光広訳、慈学社、2006年。
- 14) Cf. Shekhovstov, "Alexander Dugin and the West European New Right 1989-1994," p. 44.
- 15) Stefan Wiederkehr, »Kontinent Evrasija« — Klassischer Eurasismus und Geopolitik in der Lesart Alexander

- Dugins«, in: Markus Kaiser (Hrsg.), *Auf der Suche nach Eurasien. Politik, Religion und Alltagskultur zwischen Russland und Europa*, Bielefeld, 2004, S. 127. および、クローヴァー『ユーラシアニズム』, 第2章および第3章, 参照。
- 16) ミシェル・エルチャニコフ『ウラジーミル・プーチンの頭のなか』小林重裕訳, すばる舎, 2022年, p. 174.
- 17) Dugin, zit. nach: Wiederkehr, »Kontinent Evrasija«, S. 128.
- 18) Wiederkehr, »Kontinent Evrasija«, S. 132.
- 19) Wladimir Putin, »Von Lissabon bis Wladiwostok. Ein Gastbeitrag von Wladimir Putin«, *Süddeutsche Zeitung*, 25. November 2010, <https://www.sueddeutsche.de/wirtschaft/putin-plaedoyer-fuer-wirtschaftsgemeinschaft-von-lissabon-bis-wladiwostok-1.1027908> (2022年9月20日閲覧)
- 20) エルチャニコフ『ウラジーミル・プーチンの頭のなか』, pp. 183-184.
- 21) クローヴァーは、プーチンがドゥーギンと直接面会してユーラシア主義を知ったとしているが(クローヴァー『ユーラシアニズム』, p. 408). ラリュエルは両者が直接会った証拠はないとしてこれを否定している(マルレーヌ・ラリュエル『ファシズムとロシア』浜由樹子訳, 東京堂出版, p. 220)。
- 22) クローヴァー『ユーラシアニズム』, pp. 424-425.
- 23) 「彼〔プーチン〕が権力に復帰するとき、彼はかつての反西洋的政策に戻らざるをえないでしょう。なぜなら、私たち〔ロシア〕の社会は本質的に反西洋的だからです」(Dugin zit. nach: Micha Brumlik, »Der Philosoph hinter Putins Ideologie«, *Die Tageszeitung*, 5. März 2022, S. 17)。
- 24) Alain de Benoist, "The Idea of Empire," in *Telos*, 98/99 (1993/1994), pp. 81-98.
- 25) クローヴァー『ユーラシアニズム』, p. 332.
- 26) 同書, p. 288.
- 27) Cf. Jean-Yves Camus, "A Long-Lasting Friendship: Alexander Dugin and the French Radical Right," in Laruelle (ed.), *Eurasianism and the European Far Right*, p. 90.
- 28) Alain de Benoist, »Eurasiens Herz schlägt wieder«, *Junge Freiheit*, 3. April 2009.
- 29) 2000年代初めのドイツにおけるラルルの親ロシア的なロビー活動については、Ian Klinke, "The German in the Kremlin." *The Rise and Fall of German Eurasianism*, in Mark Bassin / Gonzalo Pozo (eds.), *The Politics of Eurasianism: identity, Popular Culture and Russia's Foreign Policy*, Rowman and Littlefield international, 2017, pp. 301-317; Ian Klinke, "Geopolitics and the political right: lessons from Germany," *International Affairs*, 94(3), 2018, pp. 495-514.
- 30) Hans Wagner, »„Die Eurasische Bewegung“ von Stefan Wiederkehr«, *Eurasisches Magazine*, 2008, <https://www.eurasischesmagazin.de/artikel/Die-Eurasische-Bewegung-von-Stefan-Wiederkehr/20080116> (2022年9月20日閲覧)
- 31) Klinke, "The German in the Kremlin," p. 308; "Geopolitics and the political right," p. 505.
- 32) Klinke, "The German in the Kremlin," p. 304; "Geopolitics and the political right," p. 506.
- 33) Klinke, "The German in the Kremlin," p. 302, 309.
- 34) *Ibid.*, p. 306.
- 35) Alexander Rahr, "Pussy Riot ushers in a new clash of civilization," *Russia Beyond*, 2012, [https://www.rbth.com/articles/2012/08/10/pussy\\_riot\\_ushers\\_in\\_a\\_new\\_clash\\_of\\_civilizations\\_17221.html](https://www.rbth.com/articles/2012/08/10/pussy_riot_ushers_in_a_new_clash_of_civilizations_17221.html) (2022年9月20日閲覧)
- 36) Klinke, "The German in the Kremlin," p. 310; "Geopolitics and the political right," p. 507.
- 37) Klinke, "Geopolitics and the political right," pp. 512-513.
- 38) ヴァイス『ドイツの新右翼』, pp. 15-19, 293.
- 39) ラリュエル『ファシズムとロシア』, p. 234.
- 40) Michael Thumann, »Gesucht: Siedler für Sibirien«, *Die Zeit*, 21. Februar 2002, [https://www.zeit.de/2002/09/Gesucht\\_Siedler\\_fuer\\_Sibirien](https://www.zeit.de/2002/09/Gesucht_Siedler_fuer_Sibirien) (2022年9月20日閲覧)
- 41) Cf. Mankoff, *With Friends Like These*, p. 17.
- 42) エルゼサーの反米主義については、Andreas Umland / Thomas Korn, »Jürgen Elsässer, Kremlpropagandist«, *Die Zeit*, 19. Juli 2014, <https://www.zeit.de/politik/deutschland/2014-07/juergen-elsaesser-russland-propaganda> (2022年9月20日閲覧)

- 43) “*Make Germany Great Again*”, S. 13.
- 44) Vgl. Umland/Korn, »Jürgen Elsässer, Kremlpropagandist«; Brumlik, »Der Philosoph hinter Putins Ideologie«
- 45) Umland/Korn, »Jürgen Elsässer, Kremlpropagandist«
- 46) Ana Lena Werner, »Antiamerikanismus in Aktion: Linke, Rechte und „Querfront“ zur Ukraine«, *Osteuropa*, 66 (3), 2016, p. 137.
- 47) ヴァイス 『ドイツの新右翼』, p. 290, および, Jörg Himmelreich, »Deutsche – Russische Wahlverwandtschaften: Die “Neue Rechte”«, Bundeszentrale für politische Bildung, 16. Oktober 2017, <https://www.bpb.de/themen/rechtsextremismus/dossier-rechtsextremismus/256080/deutsch-russische-wahlverwandtschaften-die-neue-rechte/> (2022年9月20日閲覧), 参照。
- 48) ヴァイス 『ドイツの新右翼』, p. 291 参照。
- 49) »„Jeder Westler ist ein Rassist“«, in: *Der Spiegel*, Nr. 29, Juli 2014, S. 122.
- 50) Ebd., S. 124.
- 51) Ebd., S. 122.
- 52) Dugin zit. nach: Claus Leggewie, *Anti-Europäer. Breivik. Dugin, al-Suri & Co.*, Frankfurt am Main, 2016, S. 79.
- 53) Alexander Dugin, *The Fourth Political Theory*, Arktos Media, 2012, p. 44.
- 54) Dugin zit. nach: Leggewie, *Anti-Europäer*, S. 79.
- 55) Dugin zit. nach: »Alexander Dugin: Der Vordenker«, in: *Zuerst!*, 4. Juni 2014, <https://zuerst.de/2014/06/04/alexander-dugin-der-vordenker/> (2022年9月20日閲覧)
- 56) カール・シュミット 「域外列強の干渉禁止を伴う国際法的広域秩序 国際法上のライヒ概念への寄与」岡田泉訳、『ナチスとシュミット』服部平治ほか訳, 木鐸社, 1976年, pp. 83-167.
- 57) Cf. Dugin, *The Fourth Political Theory*, p. 116; *The Rise of the Fourth Political Theory*, Arktos, 2017, pp. 72-87. また, ヴァイス 『ドイツの新右翼』, pp. 300-310 も参照。
- 58) ドゥーギンのハイデガー解釈については, Matthew Sharpe, “In the Crosshairs of the Fourfold: Critical Thoughts on Aleksandr Dugin’s Heidegger,” *Critical Horizons*, 21 (2), 2020, pp. 167-187.
- 59) Cf. Alexander Dugin, *Martin Heidegger. The Philosophy of Another Beginning*, Radix, 2014, p. 276.
- 60) Ibid., p. 390.
- 61) Ibid., p. 161.
- 62) Dugin, *The Rise of the Fourth Political Theory*, p. 6.
- 63) Samuel Salzborn, »Messianischer Antiuniversalismus: Zur politischen Theorie von Aleksandr Dugin im Spannungsfeld von eurasischen imperialismus und geopolitischem Evangelium«, in: Armin Pfahl-Traugber (Hg.), *Jahrbuch für Extremismus- und Terrorismusforschung 2014 (I)*, Brühl/Rheinland, 2014, S. 251.
- 64) Shekhovstov, “Alexander Dugin and the West European New Right 1989-1994,” pp. 39-40.
- 65) Ibid., p. 39 および, クローヴァー 『ユーラシアニズム』, p. 303 参照。
- 66) Dugin, zit nach: Salzborn, »Messianischer Antiuniversalismus«, S. 257.
- 67) Dugin, *The Fourth Political Theory*, p. 197.
- 68) Dugin, *The Rise of the Fourth Political Theory*, p. 81.
- 69) ナチス期におけるシュミット失脚の経緯については, ジョーゼフ・W・ベンダースキー 『カール・シュミット論 再検討への試み』宮本盛太郎ほか訳, 御茶の水書房, 1984年, pp. 267-298 参照。
- 70) オメーラは「白と黄色, キリスト教徒とイスラーム教徒を一つの政体のうちに混ぜ合わせるユーラシア主義」を批判している (Michael O’Maera, “The Third Political Theory,” *Counter-Currents*, April 26, 2013, <https://counter-currents.com/2013/04/the-third-political-theory/> (2022年9月20日閲覧))。また, ジョンソンもドゥーギンについて以下のような失望を表明している。「ドゥーギンが生物学的な人種現実主義とエスノナショナリズムの敵であることが明らかになったとき, 私は興味を失いました」(Greg Johnson, “2014: The Year in White Nationalism,” *Counter-Currents*, December 31, 2014, <https://counter-currents.com/2014/12/the-year-in-white-nationalism-2014/>

(2022年9月20日閲覧)。

- 71) Dugin, *The Fourth Political Theory*, p. 196.
- 72) マルティン・ハイデガー『存在と時間(四)』熊野純彦訳, 岩波文庫, 2013年, p. 260。(原文参照のうえ改訳)
- 73) ハイデガーを源泉とするドゥーギンの政治哲学については, Michael Millermann, "Alexander Dugin's Heideggerianism," in *International Journal of Political Theory*, 3 (1), 2018, pp. 1-23.
- 74) Julian Göppfarth, "Rethinking the German nation as German *Dasein*: intellectuals and Heidegger's philosophy in contemporary German New Right nationalism," in *Journal of Political Ideologies*, 25 (3), 2020, pp. 257-258.
- 75) *Ibid.*, p. 259.
- 76) *Ibid.*, p. 262.
- 77) »Das wird man wohl noch aushalten dürfen«, FAZ. NET, 29. November 2015, <https://www.faz.net/aktuell/politik/inland/die-afd-feiert-ihre-einheit-auf-dem-bundesparteitag-13939205-p3.html> (2022年9月20日閲覧)
- 78) Salzborn, »Messianischer Antiuniversalismus«, S. 254.
- 79) エティエンヌ・バリバル/イマヌエル・ウォーラーステイン『人種・国民・階級 揺らぐアイデンティティ』若森章孝ほか訳, 大村書店, 1997年, pp. 37-38.
- 80) Marine Le Pen, cited from Marlene Laruelle, "Dangerous Liaisons. Eurasianism, The European Far Right, and Putin's Russia," in Laruelle (ed.), *Eurasianism and the European Far Right*, p. 20.
- 81) Benjamin Bidder, »Vereint gegen liberale Werte: Wie Russland den rechten rand in Europa inspiriert und fördert«, Bundeszentrale für politische Bildung, 24. Juli 2017, <https://www.bpb.de/themen/rechtsextremismus/dossier-rechtsextremismus/253039/vereint-gegen-liberale-werte-wie-russland-den-rechten-rand-in-europa-inspiriert-und-foerdert/> (2022年9月20日閲覧)
- 82) »Eurasier unter sich. Mit wem sich Heinz-Christian Strache in Wien traf«, *Profil*, 10. Juni 2014, <https://www.profil.at/oesterreich/eurasier-mit-heinz-christian-strache-wien-375880> (2022年9月20日閲覧). および, ヴァイス『ドイツの新右翼』, pp. 277-279 参照。
- 83) »Gipfeltreffen mit Putins funfter Kolonne«, *Tages Anzeiger*, 3. June 2014, <https://www.tagesanzeiger.ch/gipfeltreffen-mit-putins-fuenfter-kolonne-335546606907> (2022年9月20日閲覧)
- 84) 2000年代以降の旧ソ連圏における選挙でヨーロッパ右翼が担ってきたモスクワ寄りの国際選挙監視活動については, Anton Shekhovsov, "Far-Right Election Observation Monitors in the Service of the Kremlin's Foreign Policy," in Laruelle (ed.), *Eurasianism and the European Far Right*, pp. 223-243 に詳しい。
- 85) Vgl. »Separatisten machen Propaganda mit Linke-Abgeordneten«, *Die Zeit*, 18. Februar 2015, <https://www.zeit.de/politik/ausland/2015-02/linke-abgeordnete-ukraine-hilfskonvoi-propaganda> (2022年9月20日最終閲覧)
- 86) Cf. European Platform for Democratic Elections, *Database of Politically Biased Election Observers*, <https://www.fakeobservers.org/politically-biased-election-observers.html> (2022年9月20日最終閲覧)
- 87) »Eurasian-Konzept findet Anhänger bei Linken und bei AfD«, MDR Investigativ, 2017, <https://www.mdr.de/investigativ/fakt-afd-linke-urasien-102.html> (2022年9月20日最終閲覧)
- 88) Helmut Kellershohn, »AfD-Sondierungen(4) Außenpolitische Sandkastenspiele. Die Russlandfrage aus der Sicht der jungkonservativen Neuen Rechte«, 30. Juni 2015, <https://www.diss-duisburg.de/2015/06/helmut-kellershohn-afd-sondierungen-4/> (2022年9月20日閲覧)
- 89) »„Die Krim ist nun einmal ur-russisches Territorium“«, *Die Welt*, 17. Juni 2017, <https://www.welt.de/politik/deutschland/article165650240/Die-Krim-ist-nun-einmal-ur-russisches-Territorium.html> (2022年9月20日閲覧)
- 90) »Moskaus Marionetten«, *Der Spiegel*, Nr. 15, April 2019, S. 10-18.
- 91) »Russland und die AfD: Putins blaue Helfer«, *taz*, 11. März 2019, <https://taz.de/Russland-und-die-AfD!/15579084/> (2022年9月20日閲覧)
- 92) *Ebd.*
- 93) »Russen setzen auf AfD-Abgeordneten Frohnmaier«, *Der Spiegel*, 5. April 2019, <https://www.spiegel.de/politik/>

- ausland/markus-frohnmaier-russen-setzen-auf-afd-abgeordneten-a-1261422.html (2022年9月20日閲覧)
- 94) Cf. European Platform for Democratic Elections, *Database of Politically Biased Election Observers*.
- 95) »Deutsche Behörden stufen Piskorski als bezahlten Agitator ein«, *Süddeutsche Zeitung*, 16. August 2016, [tps://www.tagesschau.de/inland/afd-russland-101.html](https://www.tagesschau.de/inland/afd-russland-101.html) (2022年9月20日閲覧)
- 96) Cf. European Platform for Democratic Elections, *Database of Politically Biased Election Observers*.
- 97) »Einflussnahme auf die AfD. Russlands Spiel mit den Rechten«, *Tagesspiegel*, 9. April 2019, <https://www.tagesspiegel.de/politik/russlands-spiel-mit-den-rechten-5323627.html> (2022年9月20日閲覧)
- 98) 「リ－ザ事件」の経緯については, Jeffrey Mankoff, *With Friends Like These: Assessing Russian Influence in Germany*, Center for Strategic & International Studies 2020, pp. 8–9.
- 99) »Bundesregierung weist Lawrows Vertuschungs-Vorwurf zurück«, *DW*, 27. Januar 2016, <https://www.dw.com/de/bundesregierung-weist-lawrows-vertuschungs-vorwurf-zur%C3%BCck/a-19007814> (2022年9月20日閲覧)
- 100) »BND: Keine Beweise für Desinformations-Kampagne Putins«, *Süddeutsche Zeitung*, 6. Februar 2017, <https://www.sueddeutsche.de/politik/geheimdienste-bnd-keine-beweise-fuer-desinformations-kampagne-putins-1.3365839> (2022年9月20日閲覧)
- 101) Bundesministeriums des Inneren, *Verfassungsschutzbericht 2016*, Spangenberg, 2017, S. 268.
- 102) »Merkel warnt vor Fake-News als Teil der hybriden Kriegsführung«, *Die Zeit*, 8. Februar 2019, <https://www.zeit.de/politik/deutschland/2019-02/bnd-nachrichtendienst-zentrale-umzug-praesident-bruno-kahl> (2022年9月20日閲覧)
- 103) この事件については, Gemma Pörzgen, »Informationskrieg in Deutschland? Zur Gefahr russischer Desinformation im Bundestagswahljahr«, *Aus Politik und Zeitgeschichte*, 19. Mai 2017, <https://www.bpb.de/shop/zeitschriften/apuz/248506/informationskrieg-in-deutschland-zur-gefahr-russischer-desinformation-im-bundestagswahljahr/> (2022年9月20日最終閲覧)
- 104) »Großangriff aus dem Netz. Deutschland im Visier«, *Die Zeit*, 23. Februar 2017, S. 1.
- 105) Vgl. Gemma Pörzgen, »Eine E-Mail in Litauen ließ deutsche Medien Fake-News-Großalarm auslösen«, *Über Medien*, 28. Februar 2017, <https://uebermedien.de/13187/eine-e-mail-in-litauen-liess-deutsche-medien-fake-news-grossalarm-ausloesen/> (2022年9月20日最終閲覧)
- 106) »Geheimdienste warnen vor Russland«, *Die Zeit*, 11. Dezember 2016, <https://www.sueddeutsche.de/politik/desinformation-geheimdienste-warnen-vor-russland-1.3289771> (2022年9月20日閲覧)
- 107) ロシアドイツ人を対象としたロシア政府や AfD の活動については, "Make Germany Great Again": *Der Kreml, die Alt-Right und die internationale Einflussnahme auf die Bundestagswahlen 2017*, Institute for Strategic Dialogue, 2017, S. 25–31.
- 108) Ebd., S. 30f.
- 109) »Geheimdienste warnen vor Russland«
- 110) Felix Krautkrämer, »Falsche Verbrüderung«, *Junge Freiheit*, 10. Mai 2019, <https://jungefreiheit.de/debatte/kommentar/2019/falsche-verbruederung/> (2022年9月20日最終閲覧)
- 111) »AfD auf Positionssuche«, *Belltower.News*, 25. Februar 2022, <https://www.belltower.news/krieg-in-der-ukraine-afd-auf-positionssuche-128415/> (2022年9月20日閲覧)
- 112) Klaus Kunze, »Ukraine und der Krieg: Wo der Feind steht«, *Wir Selbst*, 18. März 2022, <https://wir-selbst.com/2022/03/18/ukraine-und-der-krieg-wo-steht-der-wo-der-feind-steht/> (2022年9月20日閲覧)
- 113) »Putinversteher vs Ukrainefreunde«, *taz*, 25. Februar 2022, <https://taz.de/Rechte-Szene-streitet-ueber-Russlandkrieg/!5837676/> (2022年9月20日閲覧)
- 114) Vgl. »Gesprächsabend mit Podiumsdiskussion: Ukraine – Russland Konflikt!«, 8. März 2022, <https://www.afd-mol.de/podiumsdiskussion-zum-thema-krieg-in-der-ukraine> (2022年9月20日閲覧)
- 115) Vgl. »AfD verbreitet Desinformation«, *taz*, 5. April 2022, <https://taz.de/Nach-Massaker-in-Butscha!/5847874/> (2022年9月20日閲覧)